



巻頭言—“劇的”な大谷現象の精神分析—

先月の話になりますが、日本（「侍ジャパン」）は2023WBC（WORLD BASEBALL CLASSIC）において、アメリカを下し3大会ぶりの優勝を果たしました。WBCは国際野球連盟が主催し、2006年に初めて開催された野球の国際大会で、2006年に初めて開催され、日本は第1回大会と第2回大会で連続優勝し、第3回大会（2013年）、第4回大会（2017年）を経て、2021年度大会が新型コロナウイルスにより中止になり、今回で第5回目の大会でした。WBCは4年に1度開催されるオリンピックやサッカーのFIFAワールドカップに類する大会ですので、野球はサッカーほど国際的に普及していないため、出場国は30か国に留まり、しかも強豪国はMLB（アメリカ・メジャーリーグ）で活躍する選手により構成されるチームなので、実質はMLB vs NBP（日本野球連盟）という構図のもとでの大会であったともいえます。

とはいえ、「世界一」の称号を得ることは素晴らしいことですし、内容においても日本の野球のレベルは投手力ではコントロール、球速や球威においてもアメリカを凌いでおり、打者でも日本を代表するスラッガーは打率や長打力、勝負強さにおいても引けを取らないことが明らかになりました。

とりわけ大谷翔平の活躍は目覚ましいものでした。2013年に岩手県の花巻東高校から北海道日本ハムファイターズに入団し、投手と野手の「二刀流」の選手として注目されました。投手としては日本最速165キロの速球を投げ込み、打者としてもホームランを量産できる逸材であり、その飛距離も凄まじく、2014年には投手として11勝、打者としても10本塁打を打ち、日本プロ野球史上初となる「2桁勝利・2桁本塁打」を達成しました。その後、2017年のオフにロサンゼルス・エンゼルスに移籍し、2018年シーズンではメジャーリーガーとしていきなり投打にわたり活躍して新人王を受賞し、2021年シーズンでは二刀流として怪我なくシーズンを完走し、打者として打率0.257、46本塁打、100打点、投手としても9勝2敗、防御率3.18、156奪三振という成績で、「シーズンMVP」を受賞するなど、その活躍ぶりはまさに「異次元」だといえます。

そんな大谷はWBCの決勝戦でも打者として出場したあと、最終回には投手として登板し、最後の打者がアメリカではチームメイトであり、MVPを3度も受賞しているまさにスーパースターのアメリカチームの主将トラウトを三振で仕留めるという「マンガ」のような“劇的”な幕切れでした。



ということで、少々長くなりましたが、WBCの過熱ぶりは凄まじく、3月22日（木）の決勝戦の関東地区の平均世帯視聴率は平日の午前中の放送であったにもかかわらず42.4%、大谷が三振をとった際の瞬間最高視聴率は46.0%だったとのこと。またWBC中継の平均世帯視聴率（関東）の最高は、16日（木）の準々決勝（日本-イタリア戦）の48.0%でした（日本にて開催、18時より放送）が、日本戦は初戦から軒並み40%を超える高視聴率でした。

さて、まさに大谷と侍ジャパンの活躍は“劇的”だったのですが、この「劇的」というのは、あたかも「劇」でも観ているかのようなことであり、架空の物語のようだとすることを意味する表現です。球場で、あるいはテレビのモニター越しに、人びとはまるで「観劇」でもしているかのように、大谷や日本選手の奮闘に、興奮し、感激し、涙したのです。マンガのような劇的な活躍をする大谷や侍ジャパンの面々が、泣いたり、笑ったり、がっかりしたり、期待したり、興奮したりする人々の「感情」の面倒をみてくれたのです。

自らの意思で能動的に観戦していたかのようにみえて、実はまるで野球になんて興味のなかった人たちが知らず知らずのうちに引き寄せられたように、自らの意思というよりは相互に受動的な雰囲気の中かで夢中になり、歓喜していたのです（相互受動性）。たとえひとりでテレビ観戦していたとしても、「やったー！」や「すごい！」と叫ぶとき、あるいはひとり歩いていて思わずこけそうになり「おっと！」と口にするとき、だれかに話しかけたわけではありませんが、そこには<大文字の他者>の存在があります。それは、私たちが知らないうちにしている象徴的秩序でもあります。そして、「日の丸を背負って」とか「日本を代表して」というとき、「大義」として<大文字の他者>があらわれてきます。

シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋 今月のテーマ：福祉業界における DX 化

◆IT・ICT・IoT

近年の目まぐるしいデジタル技術の発展は、福祉業界にも大きな影響を及ぼしている。類似の用語や概念が多くあるので、主だったものを整理すると次のようになる。

ITとは、Information Technologyの略で、パソコンとインターネットを用いた「情報技術」のことで、18世紀の産業革命に匹敵する大きな変動をもたらしているため2000年前後の時期には「IT革命」といわれるようになり、「IT革命」は2000年の新語・流行語大賞を受賞している。しかし、大きな転換点は、パソコンの使用を極めて容易にした1995年に発売されたマイクロソフトによる「Windows95」によりパソコンやインターネットがより身近になったといえる。

ICTは、Information and Communications Technologyの略で、「情報技術の活用」を指す用語である。情報技術を「活用」ということに注目した概念で、業務においてパソコンだけでなく、スマートフォンやタブレット端末の積極的な活用も含む。「技術の使い方」という意味で使われることが多く、実際、パソコンでやりとりしていた電子メールをスマートフォンやタブレットでも使えるようになり、オフィスにいらなくてもメールをチェックし、業務を行うことはいまやごく当たり前になっている。

また、IoTとはInternet of Thingsの略で「モノのインターネット」といわれ、モノがインターネットにつながることを指す概念である。上記のスマートフォンやタブレットを用いたインターネットへの接続のみならず、家電や自動車といった「モノ」がインターネットに接続する技術が急速に進展している。こうした「モノ」がインターネットを介すことで、より快適に使用することができるような技術のことをIoTという。ICTが情報技術による「コミュニケーション」に力点を置いているとすると、IoTの場合は「モノ」がインターネットに接続される行為そのものを指すという違いがある。今日では、外出先からペットに餌をあげたり、お風呂を沸すなどの操作できる「スマート家電」や「Bluetooth・ワイヤレスイヤホン」なども含まれる。

◆デジタルトランスフォーメーション (DX) とは

では「デジタルトランスフォーメーション」(Digital Transformation)とは、どのような概念であろうか。略すと「DT」となるが、「DX」とされるのは、英語圏では交差を意味する「trans」を「X」と略すことがあるために、「DX」と表記されている。

こうしたDXには、デジタル化されたデータを活用することで新たなビジネスモデルを創り出すこと、あるいは業務や製造プロセスを変革するという意味が込められている。したがって、たとえば書類をデジタル化して、業務を効率化するといった意味での「デジタイゼーション(Digitization)」とは(そうした側面もあり、似た概念ではあるものの)イコールではない。単に効率化を図るだけでなく、「新しいモデルの創造」、それまでの業務に「革新」や「変革」をもたらすことが重要となる。

たとえば、POS(Point of sale=販売時点情報管理)というのは、商品が売れると、商品名・価格・売れた時間・個数・販売店舗などの細かい情報を記録することができ、それに基づいた商品管理や分析を可能とするシステムのことである。顧客の側がポイントカードを利用したり、キャッシュレス決済などをする場合には、そこに性別や年齢などの顧客情報も加わることになる。こうしたデータに季節、天候や気温などの情報とも関連づければ、まさにマーケティングの機能をもつようになる。

実際、こうしたデータ管理が行われているために、コンビニやスーパーなど、同じチェーン店でも、立地場所などにより売れ筋が変わるので、それに応じた品揃えが行われたり、顧客データに応じて、個々の顧客にダイレクトに商品案内などが行われるようになる。

こうしたことは一例にすぎず、すでに普及しているために、特別に目新しいことでもない。重要なことは、今日ではこうした「DX」化が、日進月歩、進歩しているだけでなく、企業や行政が積極的に取り入れて、業務の改善を図ろうとしているところにある。

その背景には、人手不足や働き方改革の推進がある。今日の日本は、人口減少傾向に入っており、今後ますます人手不足は進行する。その一方で、働き方改革が推進されていることから、労働時間を短くし、より効率的に業務を遂行できるような仕組みにしていくことが、求められているということが挙げられる。

◆福祉業界における DX 化

人材不足の解消や業務の効率化の推進は、福祉業界においても焦眉の急である。それだけにそれらに対する方策のひとつとして、「DX化」もまた積極的に取り組むべき課題であるといえる。すでに部分的な取り組みが行われているが、記録業務や職員間の情報共有におけるDX化は、業務の効率化においても有効に機能する可能性がある。たとえば、利用者の支援上の記録(ケース記録)をスマートフォンから音声入力により、その都度、規定のフォーマットに入力できれば、「記録」を「書く・入力」する手間を大幅に減少できる。また、そうした記録をデータベース化すれば、個々の利用者の経年比較だけでなく、一定の利用者情報としても集約でき、新たな支援のプログラムを検討する上でも参考になる。

また、今後、人工知能(AI)を研究する非営利団体である「Open AI」が開発した「チャットGPT」は、会話を通じてネット上の情報を瞬時に集約し、整理して、質問に答えてくれるシステムで、これまた急速に普及していくことが予測されている。

こうしたチャットGPTの活用も含め、DX化を推進することは、福祉業界の組織運営と支援を革新していく可能性がある。しかし、その目的は業務の効率化それ自体ではない。利用者支援の質の向上と利用者のエンパワーメントことが、基本的な目的である。DX化の推進は、そのために専門職である職員には、なにができるのか、なにをすべきなのかということ問いかけることにもなるといえる。KCDラボ代表 松端克文

(武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授)

* 毎月ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

シリーズ 心理学の知見を活かす①

～「憧れ・闘争・逃避とチームワーク」～

昨年度、全6回シリーズで、支援に繋がる心理学の内容をお伝えしました。本年度は、支援者の心を軽くする心理学の知見を活かすシリーズとして、4月～3月まで全12回でお伝えしていきたいと思えます。

前シリーズの最初は、心理学の歴史を紐解きました。

今シリーズの第1回目は、基礎心理学と組織心理学からの知見です。感情や情動のメカニズムと新しいメンバーが加わった組織作りを考えてみませんか。

◆エピソード1「憧れることをやめましょう！」

このフレーズはあまりにも有名なので、いまさら、説明はいらないかもしれませんが、WBCの決勝戦前に大谷翔平選手がチームのみんなの前で「僕から一言だけ…」の続きに言ったフレーズですね。この続き後の概略も含めると、「憧れることを



やめましょう。憧れてしまったら、超えられないんで。僕らは、トップになるために来たので。今日一日だけは、憧れるのをやめて、勝つことだけ考えていきましょう！」でした。

心理学的に「憧れ」は、自分よりも優れた相手を対象に抱く感情です。大谷選手はメンタル面も強いといわれていますが、感情を常に意識化できているのかもしれませんが、自分よりも相手が優れているという気持ちのままでは、勝てないということを理解しているからこそその言葉といえます。ほかの選手のなかにもあった「自分よりも優れている相手なので勝てないかもしれない」という思い（弱音）を断ち切って、「勝つ」という目標への闘争心でチームをひとつにしたことが優勝という結果に繋がったように思えます。

◆感情や情動、「闘争（戦う）」か「逃避（逃げる）」

上記のエピソードにもあるように、共通の目標に向けて、個人の感情や情動も同じ方向に向かえることがチームワークの根源なのでしょう。

では、感情や情動の違いは、为什么呢？感情とは、一般的な「喜怒哀楽」を意味し、情動とは、「激怒、喜悦、恐怖、悲観」という生理的な意味合いが強いことばです。感情・情動はどのように生じるかという学説には、末梢起源説（ジェームズ・ランゲ説）と視床起源説（キャノン・バード説）があります。たとえば、森のなかで熊に出会ったときに、身体が震えるということを大脳が知覚して「恐怖」が生じるのが末梢起源説です。一方、視床起源説では、熊を視床という脳の一部が知覚し、その情報が、大脳にある情報（熊=危険）とマッチングされ、「恐怖」という情動が生じ、震えるという身体反応も生じると考えられています。

「恐怖」を感じたとき、どのような行動をとるのでしょうか。アメリカの生理学者のキャノンの説によると、大きく2つ、「ファイト・オア・フライト (fight-or-flight)」説、つまり「闘争（戦う）」か「逃避（逃げる）」といわれています。戦い方や逃げ方のバリエーションは千差万別ですが、「闘争（戦う）」を選択したときには、自分のなかにある闘争心を最大に引き上げないといけません。そうしなければ、「勝てない

かもしれない」と気持ちが振れて、すぐに負けてしまうからです。しかし、「闘争（戦う）」ばかりでは、ストレスが大きいため、ときには、「逃避（逃げる）」を選択する必要があります。自分を守る防衛機能として、「逃避（逃げる）」という選択もありなのです。

「闘争（戦う）」の選択では、ひとりではなく、同じ気持ちの仲間と一緒に戦うことで最大限の潜在能力が発揮できることでしょう。紹介したエピソードのチームワークの効果です。しかし、常勝ばかりが、チームワークではありません。

「逃避（逃げる）」の選択でも、自分を責めるのではなく、自分の弱さや限界を意識し、仲間にも伝えることで、困難に立ち向かうエネルギーが得られます。組織心理学では、「チームワークは、助け合い、お互いの弱点を補完することで、個人では達成できない仕事を、組織として成し遂げるときに発生する力」と定義されています。

◆「憧れ」は良性的「妬み」

人が複数集まれば、組織になります。もし、AI(人工知能)をもつロボットの集合体で人間の組織を再現する試みがあったとすれば、どのような結果になるでしょう。だれもが、人間と比べてミスが少なく、作業効率の高いチームになると思われるかもしれませんが、しかし、人間の組織を100%再現することがむずかしいのも事実です。なぜなら、ロボットは、ほかのロボットと自分を比較して、感情をもつことができないからです。

人間の組織には、自分と人を比べて生まれる「妬み」という感情があります。「妬み」は、ときとして、他人への攻撃を生み、人間関係に亀裂が生じ、組織が分断される一因にもなります。「敵意・憤怒」の感情からくる「妬み」は、「あの人がさえないければ」という排他的志向になります。逆に、「憧れ」の感情は「あの人のようになりたい、あの人と一緒にやりたい」と協力的志向になります。この、「敵意・憤怒」と「憧れ」の相反するような2つの感情は、どちらも自分より優れた相手を対象とした「妬み」なのです。前者を悪性の妬み、後者を良性的妬みと言い分けたりします。「憧れとジェラシー」は、人間こそが抱く感情なのです。

◆「妬み」の力をマネージメント

以上のように「妬み」という言葉からは、ネガティブな印象を受けることかもしれませんが、良性的「妬み」は、「あの人が負けないように、少しでも追いつけるように」と自分のパフォーマンスを高めようとする方向に傾きます。

逆に、悪性の「妬み」の感情を意識したときに、どうすればいいでしょうか。「敵意・憤怒」の感情を意識し、良性的「妬み」に転化させると、「相手にアドバイスをもらって積極的に学ぶ」姿勢をもつことができます。そして、チームのなかで「妬む人」と「妬まれる人」が手を組んだときに、「妬む人」のパフォーマンスが大きく向上し、よりよい関係性が構築されると報告されています。

また、悪性の「妬み」を生まない組織土壌をつくるには、個人目標を他者と比べる目標にするのではなく、自分基準で達成感がもてるようにすることが大切とされています。

(連カン室 高畑 英樹)

シリーズ 強度行動障害支援 超実践④

～これってなんなん？なんでなん？～

◆実践報告会、開催！

今号では、前号で紹介した実践報告会の内容についてお伝えしたいと思います！

3月6日に兵庫県福祉センターで実施された『2022年度兵庫県強度行動障害 SV 養成事業における実践報告会』に、運営・報告者として遠山さんと参加しました。参加者総数は102名！兵庫県内の5つの法人が1年間の取り組みを報告する、といった内容です。今年度は5拠点（陽気会、福成会、五倫会、五色精光園、愛心園）ということで、前年度に比べるとかなりボリュームアップしています。5拠点で協力しながら報告資料を作成し、会場を借りて練習し、その資料の修正など準備にはそれぞれ時間と労力をかけました。その甲斐あって、5拠点ともすばらしい報告となりました。

実践報告会の開催は今年で3回目ですが、過去2回はコロナの影響でオンラインだったため、会場に多くの人がいるのは初めてでした。私たちと同じような現場で強度行動障害の支援に日々悩み、「困りごと」を抱えている方がこんなにもたくさんいるということに驚いたのと同時に、悩みながらも兵庫県下で「一体となって支援をしていこう」という熱い思いも感じることができました。

陽気会の実践報告は私が担当したのですが、5番目の報告で、皆さんからは「トリヤから頼むね！」など、たくさんのエールをいただき、プレッシャーを感じながらもなんとか乗り切りました(笑)。

◆実践報告会を終えて

どの実践報告にも共通しているのが、トントン拍子にうまくいっているといったことはなく、さまざまな失敗を重ねながらも支援を継続することで、少しずつ成果が出てきているということでした。また、その支援を継続させていくために、法人として強度行動障害の支援にどう向き合っていくかということ、支援者と一体となって考えて対策していくことが大事であると感じました。

厚生労働省の社会保障審議会（障害者部会）の『強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会』などの構成員でもある、北摂杉の子会の松上理事長に総評をいただきましたが、今回の実践報告では、特性の理解が深いことやアセスメントがしっかりできている、ということに大変驚かされていました。またさまざまな研修プログラムがあるなかで、「学んだことを実践に移すことができない」、「アセスメントがむずかしい」という強度行動障害を支援する上で課題となっている点をクリアしていると評価をいただき、この取り組みの中核の人材（＝人材を育成する人材である SV）を機能させて、ノースカロライナ州にあるアルバマーレのGHAのように、強度行動障害をもつ方々が地域で生活することをゴールとして目指して欲しいということをお話されました。

さらに大事な点として、視覚的な提示をしているがそれは行動障害の改善や管理が目的なのではなく、ご利用者本人が自立的に豊かに生活できるようにすることが目的である、と

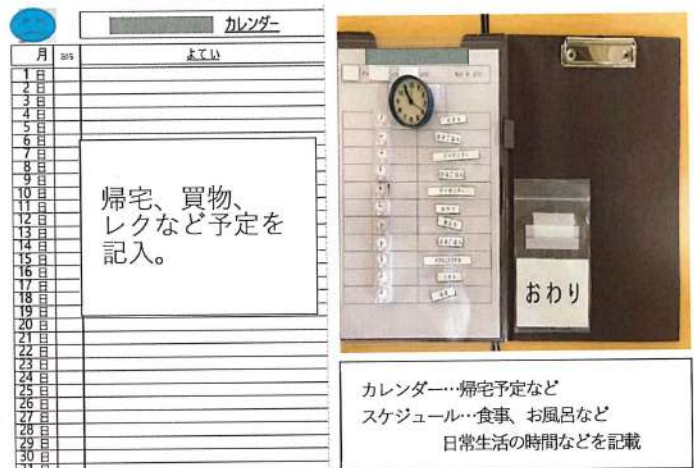
も話しておられました。そのほかにも、行動障害を誘発させないために、幼児期・学齢期に適切な支援をしていく予防的支援の必要性についての話や、障害支援区分認定の行動関連項目の点数が高ければ加算が手厚く、下がると加算がつかなくなることを変えていきたいこと、そのための支援の評価基準や取り組みをチェックする仕組みも考えていきたいこと…など大変興味深い話をたくさん伺うことができました。

◆超実践！

今回はイマジネーション、想像の苦手さを補う方法の実践として11月からグループホームで生活することになったAさんの例を紹介します。

・想像の苦手さを補うために

カレンダーと1日のスケジュールを作成し提供しました。



Aさんは数字や文字を読めますが、数字に関しては独特な理解を示しており、日常的にあふれている数字（たとえばエレベーターの階表示や電話のボタンの数列など）の表現となりが違うかの境界線がなく、一般的なカレンダーだと混乱する様子だったので、上から下に流れるシンプルな提示（写真左）にしました。予定（写真右）を時計表記にしたのも同じ理由です。また、予定は1日の流れを提示しているので、変更があるときは本人と一緒に変更し、予定を知らせるようにしています。

・なにを、どう伝えるのか

Aさんに対して提示を考えるとときに大事にしたことは、視覚的な提示をするということではなく、「なにを知りたくてそのことに関してどのような想像ができていないのか」、「どう補ってあげればいいのか」を視点に構成したこと。カレンダーとスケジュール以外にもAさんには、「お菓子の回数ボード」や「タブレット使用ボード」などを作成し提示していますが、どの提示にも共通しているのは、Aさん自身が気にはなっているけれど想像できていなかった「いま、Aさんはこんな状況ですよ」ということを、提示を確認することで理解してもらえるように作成しているということです。あくまでも視覚的なツールは、そのことを伝える手段と考えて提示していて、このようなツールを上手に使いながら、Aさんと支援員で日常を組み立てていくことが、障害福祉における「配慮」や「支援」にあたるのではないかと考えています。

（日中活動支援部 大谷 健太）

シリーズ 施設長リレーインタビュー④ ～みのたに園～

シリーズ 4 回目の今号では、2020 年度から生活介護事業所のみのたに園の管理者をされている、岡村浩二氏にお話を伺いました。

——現在のみのたに園について教えてください。

定員は 57 名で、現在は 55 名の方が利用されています。自力登園をされている方は 18 名、ほかの方はご家族の送迎や、園の送迎サービスを利用されています。

送迎サービスは灘区・長田区方面、北区南方面と北方面のルートがあり、3 台の送迎車で実施しています。送迎の調整は本当にむずかしいところなのですが、ご利用者・ご家族共に高齢化が進んでいる方々にとって、送迎は必要不可欠になってきているので、今後もなんとかやりくりをして続けていきたいと考えています。

——生活介護で行っている日中活動は？

みのたに園では現在、①機能維持のための軽運動 ②軽作業 ③制作・余暇活動の 3 つの取り組みを中心に、日中活動を展開しています。

1 つ目の機能維持のための軽運動は、ストレッチやウォーキングなど、体を動かして体力や身体機能を維持することを目的に取り組んでいます。利用者の方々に気持ちよく楽しみながら体を動かしてもらえよう工夫して行っています。

2 つ目の軽作業は、企業からの受注作業（安全工具の加工と包装、うどんの包装など）や、さをり織り、空き缶リサイクルや紙すき、オットマン（牛乳パック椅子）製作、農園作業などを行っています。オットマンは好評いただいてまして、先日、近隣施設からまとまった注文をいただき、現在がんばって作っているところです。

生活介護事業に移行する前は通所授産施設でしたので、現在でも作業を受注していますが、高齢化に伴い、年々作業に取り組むことがむずかしくなってきたご利用者が増えました。でも、年齢の若い利用者の方々に「試験的に取り組む」という形で、いろいろな作業を経験していただくことができている。

3 つ目の制作・余暇活動は、主に貼り絵を行っています。紙をちぎるところから、下絵を見ながら糊で貼りつける工程に取り組んでいます。完成した作品は、外部の方にも見ていただけるよう展示しています。

——隣の建物は新しい活動場所でしょうか。

そうですね。昨年 11 月から、作業と制作の活動の場所として活用しています。以前は銀行でしたので、取り組む活動内容を考えて、使いやすいように改装しました。

1 階はご利用者の活動場所として使用し、2 階は今後会議や研修スペースとして活用できればと考えています。

こちらでは職員 3 名ほどで、14～15 名のご利用者と一緒に活動を行っています。作業ごとに区分けを行い、同線を考慮して配置しています。

交差点の目立つところがあるので、将来的にはここを「地域の方々と交流できる拠点」にできれば…と考えています。



コロナ禍で、それまで実施していたふれあい喫茶などの地域交流ができなくなっているのも、今後復活していきたいと思っています。地域の方々からも楽しみにしているという声をいただいています…大変ありがたいです。

——課題としてはどのようなことがありますか？

課題といえますか、考えているのは「次のステージへつなげる支援」についてです。

ご利用者の生活はみのたに園だけで完結するものではないので、現在の利用者支援は当然のことですが、それだけではなくご家族も含めた将来につなげる支援が必要だと感じています。

近年、家庭からグループホームへ移行された方もいらっしゃいますが、ホームでの余暇の過ごし方がわからない、といった現状が見えてきました。

みのたに園として、今後「余暇をご本人なりに楽しく過ごせるなにかを見つけるきっかけ」が活動のなかで提供できないか…と考えています。それが軽作業であったり制作活動であったり、いまのみのたに園での活動やかかわりを通して、将来のご利用者の生活に少しでもつなげていくことができればよいと思っています。

また、ここ数年さまざまな理由で登園自体がむずかしくなっているご利用者が増えています。コロナの影響も要因のひとつだと思いますが、「みのたに園に行く」ということが日常生活の一部として戻るように、これからも働きかけていきたいと考えています。

——最後に…園長はいろいろな資格をおもちとか？

福祉に関する資格は陽気会に入ってから勉強しましたが、前職は鉄鋼関係の製造業でしたので、溶接や危険物取扱い、リフトなど、あまり福祉ではなじみのない資格も持っています。ちょっとした修理などは得意なので、必要であればいつでも呼んでください(笑)！

——ぜひお願いします。本日はありがとうございました。

みのたに園はこの 4 月から開園 40 年目に入ること、生活介護事業所に移行してからも、共同生活援助事業を始めてからも、ずっと箕谷の地域のなかで、住民の方々とふれあいを大事にしながら続いてきたことを園長に伺いました。一日も早く、皆さんが楽しみにされているふれあい喫茶などの地域交流が再開されますように。
(編集委員会)

ちょっといいですか？大西ですけど…

—この業界を選んだ皆さまへ—

◆特別な日

新年度が始まりました。本年度はコロナ感染症の規制も緩和され、多くの施設では、数年前のようにあれこれと行事を計画されていることだと思います。行事や外出、旅行等、「特別な」日は、ご利用者も私たち職員も、ワクワク気分でテンションが上がりますね。このような機会は、多ければ多いほどいいものだと思いますが、そこは、予算や職員数などの影響で、特別な日は、月1回程度としているところが多いのではないのでしょうか。職員が、あれこれ苦勞しながらもこの特別な日を企画し、実施するのは、そこに利用者の方々の普段と違う表情（その多くは「笑顔」ですね）を見ることができたり、そこに普段と違う雰囲気や漂ったり…、非日常の世界が展開されるからなのだと思います。単純で単調になりがちな施設生活だからこそ、この非日常の世界は、ご利用者にも職員にも大きな影響を与えています。

利用者皆さまの笑顔が、この仕事の、私たち職員の一歩の励みです。「楽しかった」とか「いい気分でした」と言っていたから、また苦勞してでも特別な日を企画しようと思えます。そして「ここはいいところです」「ここで生活できてよかったです」というご利用者のひとことが、明日の活力につながっていきます。この仕事をやっていてよかったと思える瞬間です。

◆相手を幸せに

職員にとって、毎日が、特別な日のように楽しい日々ならいいことありません。が、実際には、さまざまなことが起こります。ご利用者の支援をどうすればいいか、どうすれば楽しい生活ができるか、どうすれば幸せな人生を送っていただくことができるか、これに向かって仕事をしていくだけでも相当な労力を要します。ここに、職員間の人間関係やらが加わってくるとそちらの方の対応に追われていきます。ひとりの人間が対応できる人間関係には限界があります。で、その限界を超えてしまったときに、そこから去るという選択をします。退職とは、多くの人間関係から解放される方法でもあります。

この仕事は人相手の仕事です、障害があるという方の幸せを考える仕事です。ご利用者の幸せを考える気持ちと同じ気持ちで、職員やご家族をはじめ多くの関係者と付き合っていくことができれば、人間関係はうまくいくのではないかと思います。

この仕事は、相手を幸せにすることで自分自身も幸せになることができる唯一の仕事だと思います。この春にこの業界に入られた多くの皆さまが、いつまでもこの業界に留まっていただくことを願っています。(大)

陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、昨年の9月から65年目に入りました。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000 円

個人サポーター 年間 1,000 円

サポーターの皆さま、いつもありがとうございます

陽気会の SNS

Facebook Instagram Twitter
フォローよろしくお願いします

編集委員会：松端 克文

大西 博之・朝日 満子

大島 由香利

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078(981)7271

Fax : 078(981)0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email: kcclab@youkikai.or.jp

